

おとなの繰りごと

——幼時と音楽——



利根川 裕

ある日、訪ねてきた友人がウィスキーをふくみながらいった。
「きみ、知っているかね、スタンダードは仕事をとりかか
る前には、かならずモーツァルトを聴くのを日課にしていた
そうだぜ」

この一言がこちらの胸に残り、スタンダードにあやかっ
て、まずモーツァルトを、という日課をしばらくつづけてみ
たことがある。おかげで、文章がメキメキうまくなったかど
うか、それは知らない。

ところで、私の聴くモーツァルトは、むしろレコードであ
る。そして、うかつなことに、スタンダードも私とおなじよ
うにレコードを聴いていたのであらうと早合点していたのだ
が、考えてみれば、スタンダードの時代に、LPはもとよ
り、SPも電気吹込みもあらうはずはない。さては悪友にい

っぱい喰わされたか、と地団駄ふんだが、仕事の前にモーツ
ァルトを聴くよろこびのほうはますます募ってきて、悪友に
は悪友の効能があるものだ、むしろ彼に感謝したくらいで
ある。

しかしまた、彼が満更ウソをついたのではないとも考えて
みた。たいへん独創的なモーツァルト論を書いたスタンダー
ドである。スタンダードはきつと、毎日モーツァルトを自分
で弾いたのではなかったか。そう思いつくと、スタンダード
への嫉妬なのか、モーツァルトへの嫉妬なのか、とにかくこ
ちらも、ぜひともモーツァルトを自分の指のなかに封じこめ
たくなって、憑かれたようにピアノに向い出した。

——と書いてくると、いかにも私がピアノの名人上手のよ
うに聞こえかねないが、話はそううまくはいかない。ピアノ
にかぎらず、私が操りこなせる楽器は何一つない。残念なが

ら、ちゃんと先生について訓練したことは一度もないのである。三十の手習いか、四十の手習いで、いい加減中年になつてから、独学でバイエルをはじめてみたが、その音を聞いた近所の人たちが、

「おたくの坊っちゃん、ピアノに熱心ですね」

などというのを耳にしたうちの小セガレが、

「たのむよ、おとうさん。ピアノやめてくれないかな」

という始末。そのときセガレは、たった小学校二年生だったのだから、私の野心と自尊心がどれほど手ひどい衝撃をうけたかは、いとも哀れなことである。しかし、盗人にも三分の理、そのときの私が、モーツァルトを弾くスタンダードの幸福を、自分もまたぜひとも所有しなければならぬと本気に決意していたのは事実である。

* * * *

くやしきぎれにいうと、私の育った北陸の小さな町では、わが家はもとより、ピアノのある家などはほとんど皆無で、たしか中学校長の家と、女学校の音楽の先生の家と、郵便局長の家くらいではなかったかしら。蓄音機は時計屋で扱っていたが、たまさか、その店頭にかかっている新譜音盤ポスターとなると、××の浪曲だったり、××の○○音頭なのだ

から、かりに潜在的に音楽的大才を所有していたにせよ、どう開花させてみようもなかった次第である。わが町に限るまい。これが三十年か四十年前の日本の平均的環境であつたはずである。

大才であるかとはともかく、しかしあらゆる幼児や少年には、人間の本能としての音楽的表現の要求はひそんでいるわけで、文章でも画でも満たされない厄介な欲求不満が噴きあげてくると、私はハーモニカにむしゃぶりついたものである。ハーモニカは滝廉太郎や山田耕筰を誘いだしてはくれたが、茫漠として渦巻いている少年の内的世界は、廉太郎や耕筰が導いてくれる方向だけではあきたらず、さりとて、ほかに誘導してくる音楽世界を知らないまま、次第に憂鬱になり不機嫌になり、千切れ千切れに湧いてくる想念を自分勝手な音の組合せに託すはかばかかった。

あのとき、もしモーツァルトを知っていたら、もしショパンを知っていたら、もしドビュッシーを知っていたら、いや、そんな名前はどうでもいいのだが、とにかくそういう音楽世界のあることを知っていたなら、少年はあんなにも自分を扱いかねて身もだえしなくてもよかつたのであつたらう。

後年、私はモーツァルトの名もショパンの名もドビュッ

1の名も覚えた。また、いささかはその音楽世界に馴染むようになった。それらのおかげで、私の内的世界にある拡がり、ある方向づけができたのはたしかである。

いかにもいまの私は、なんにも知らなかった、かつての幼時や少年期とは比ぶべくもないほどの音楽的知識をかかえている。しかし、あの小さかったとき、何か音が鳴ってくれ、どこかに自分の心をいいあててくれる音はないか、と探し求めていた本能的激情を、いまはもう失っている。

ふくれ面してハーモニカを吹いていた私と、カラヤンとベームの相違などを吹聴したがるいまの私とは、疑いもなく往時のほうが上等である。ここでは、音楽はすこしも教養的装飾にわすらわされることなしに、いわば無垢のまま要求されてきたのだったから。

後悔話ばかりではシャクだから、中年になってからの、よろこばしい音楽体験を一つつけ加える。

×年前、私は東京文化会館の大ホールで、モーツァルトのオペラ『ドン・ジョバンニ』を聴いていた。それが、ごく質のいい演奏であったかどうかは、このさいどちらでもいい。また、その当時私がどんな心境で生きていたのかも、このさいは省略するとして、この序曲が演奏されはじめてから二時

間あまり、ついにドン・ジョバンニが劫火に焼かれてしまう終りまで、そこで鳴り、歌われる一切の音が、私のなかに吸いこまれてゆき、私の心という心のすべてが正確無比にいいあてられ、のみならず、私のなかにあって私の気づかずにいたものが引きだされ、それに明瞭なイメージが与えられたのである。

私は、自分が発見されてゆくような思いに感動し、陶醉し、圧倒されていた。そして私は、かつてのこのどとき、音楽にさらわれたいと焦りながら、ついにさらってくれる音楽に出会えず苛立っていた自分の姿を、数十年ぶりにはっきりと再現することができ、しかもその未遂だった欲求が、いまはじめて、ここで満足させてもらえているという実感のさなかにいたのである。

そのとき以来、モーツァルトは音楽という音楽のなかで、私にとっては格別なものとなった。

* * * * *

私の育った時代的環境と、うちの小セガレのそれとでは、たいへんな相違がある。そして、いまのところ私のもつ諸能力は、まだ小セガレ程度をぐんと凌駕していると思っっているが、いかにせん、耳の能力となると、はっきり私の負けであ

る。

音楽を意識的に聴こうとする苦勞は、私のほうが何十倍も重ねてきたはずにもかかわらず、とても彼の耳にはかなわな
い。音楽なんて耳でだけ受取るものじゃない、とりきんでは
みるものの、これは負け惜しみである。けっきょくは、耳の
問題である。他のどんな能力が参加してくれようと、耳の
悪いところにいい音楽世界は成立しうべくもない。そして残
念ながら、耳の鍛錬は、もうおとなになってからでは遅すぎ
るのである。

小セガレが、私よりいい耳をもっているために、そしてま
た、かつての私よりうんと多くの音楽世界を知っているため
に、むかし私が自分をさいなんでみたような音楽的飢餓から
免れえているのかどうかは、よくわからない。またそのため
に、彼が私より広くて自由な自己表現の世界を身につけてい
るのかどうかも、よくわからない。あらゆる人間の欲望が、
より多くの充足を求める貪婪なものである以上、恵まれた人
間には恵まれたなりの飢餓状態を生みだすでもあろう。ただ、
彼にも飢餓状態があるとして、それが往時の私より音楽的質
度の高いものであることだけは間違いない。

蛇足をつけ加えれば、小セガレには、小学校一年になろう

とするところから、ピアノのレッスンを受けさせている。日本
の芸ごとの世界では、六歳六か月から稽古をはじめよ、とい
うならわしがあるらしいし、たまたま小セガレのレッスンは
六歳六か月目からはじまったのだが、私の気持としては、芸
ごとを仕込みたいのではない。

気取ったことをいうようだが、私はこんにち、私たちを取
巻いている音の氾濫にほとほと閉口している一人である。そ
こでは音楽的秩序とは無関係な、恣意的で偶発的で露出的な
音のけたたましさが、まるで人間解放の表現でもあるよう
にかき鳴らされている。あるいは少しばかり楽器をいじれる
若者が、芸人気どりで音を発散させている。

できることなら、小セガレが音楽をそういうものと区別す
る能力をもってほしいのである。さいわいレッスンの先生
は、きわめてオーソドックスに、きわめてストイックに教え
てくださっている。

なろうことなら、いつの日か、モーツァルトの「二台のピ
アノのためのソナタ」でも小セガレと弾いてみたいのだが、こ
れはオヤジのほうのウデがそこまで届きそうにない。

(作家)